

「彼は異端児だ」、そういう言葉を聞いたことはありませんか。一般的に「異端」という言葉は、あまりいい意味で用いられていないように感じますが、いかがでしょうか。

キリスト教はもともと、ユダヤ教の分派と考えられていました。ナザレのイエスを救い主と信じる人々は、「ナザレ派」という名前で呼ばれていました。しかしユダヤ教徒からすると、キリスト教の教えは受け入れられるものではありませんでした。そしてユダヤ教徒はキリスト教徒を「異端」と考えたのです。キリスト教はこうして、ユダヤ教とは別の宗教となりました。

キリスト教の歴史の中でも、「異端」と呼ばれるグループや人物は数多く出てきます。そもそも「異端」というのは「正統」なものが決まってはじめて出てくるものです。キリスト教の教理が固まっていくのは 325 年のニカイア公会議から 381 年のコンスタンチノポリス公会議にかけてです。その時にまず、父・子・聖霊という三位一体論が確立します。簡単に言いますと、父なる神と子なるキリストそして聖霊は、一つの神だけれども三つの位格を持つということです。

なかなか理解しづらいことかも知れませんが。しかし正教会ではこの三位一体論は、「理解する」対象ではなく「信じる」対象としての神秘的なのだといいます。

ともかく、この教理が確立したことで、キリストは父なる神の被造物だ(アレイオス派)とか、聖霊は神ではない(マケドニオス派)といった考え方は異端とされるのです。

その他、キリストは完全な神であり、完全な人であるという考え方に反するものも異端となります。このように、自分たちの正当性を守るために、違う考え方を排除していったといえるのかもしれませんが。

次回は「異邦人」です。お楽しみに。



「暴かれて焼かれるウィクリフの墓」
ジョン・フォックスの本より (1563 年)

彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを贖ってくださった主を拒否しました。

(ペトロの手紙二 2章1節)

